

Japanese Journal of College Mental Health

# 大学のメンタルヘルス VOL.2

2018 October

## 日本の大学生における 性暴力被害経験と精神健康度

河野美江・執行三佳・武田美輪子・折橋洋介・  
大草亘孝・川島渉・布施泰子

# 日本の大学生における性暴力被害経験と精神健康度

河野美江<sup>1)</sup> 執行三佳<sup>1)</sup> 武田美輪子<sup>2)</sup> 折橋洋介<sup>3)</sup> 大草亘孝<sup>4)</sup> 川島涉<sup>5)</sup> 布施泰子<sup>6)</sup>

1) 島根大学保健管理センター 2) 島根大学 地域包括ケア教育研究センター 3) 広島大学社会科学研究所  
4) 大阪歯科大学歯科法医学 5) 大阪歯科大学解剖学 6) 茨城大学保健管理センター

## 要 旨

近年、大学生の性暴力事件が報道されているが、実際は大学相談機関に被害者が相談に来ることは少なく、被害者が安心して支援を求められる体制整備は喫緊の課題である。今回我々は、大学における性暴力被害者に対する支援や性暴力に対する予防教育の必要性を明らかにすることを目的に、大学生における性暴力被害の実態と性暴力に関連する知識を調査し、性暴力被害経験と精神健康度との関連について検討した。

対象と方法: 機縁法にて協力の得られた10大学20歳以上の大学生3,357人に無記名・自記式のアンケート調査を実施、有効回答の得られた643部を分析対象とした(回収率19.6%)。

結果: レイプ未遂は7.8% (男子3.1%、女子9.7%)、レイプ既遂は2.6% (男子1.6%、女子3.1%)、何らかの性暴力被害経験は42.5%にあった。緊急避妊ピルについての知識は60.0%にあったものの、性暴力救済センターについては13.7%であった。また、性暴力被害経験のある学生のGHQ得点は $4.2 \pm 3.2$ 点と被害経験のない学生に比べ有意に高く( $p < 0.001$ )、被害強度、被害重複数と弱い相関が認められ( $p < 0.001$ )、重度の被害ではメンタルヘルスに深刻な影響をもたらすことがわかった。

以上より、大学生に対して、性暴力に対する予防教育を行うと共に、大学の相談機関における性暴力被害者に対する支援方法の確立が急務と考えられた。

キーワード 大学生、性暴力被害、精神健康度、大学相談機関、被害者支援

## I. はじめに

わが国の性暴力被害は強姦989件、強制わいせつ6,188件(2016年度、男女計)である<sup>1)</sup>が、警察に被害を届け出る女性はわずか18.5%<sup>2)</sup>と報告されており、被害者が被害を届け出ないことにより顕在化しない事案が多い犯罪と言われている。また、今まで日本で行われた大学生の調査では、意に反する性交が1.8%<sup>3)</sup>、レイプ既遂が3.4%<sup>4)</sup>と報告されている。しかし、実際に大学相談機関に被害者が相談に来ることは少なく、学生の中には被害を受けながら相談に来ない者や、他の主訴で相談機関を訪れる被害者もいると考えられる。

性暴力被害者は望まない妊娠や性感染症のリスクのみならず、精神的に強いストレスを受け、その後の生活に大きな支障をきたす。大学において被害者が安心

して支援を求められる体制整備は喫緊の課題である。米国では大学において性暴力被害者支援と性暴力被害に対する予防教育を行う性暴力被害者支援室が存在するが<sup>5)</sup>、日本の大学においてはいくつかの大学で行われているに過ぎない。大学において有効な支援や教育を行うためには、大学生における被害の実態と性暴力被害に関する知識などを適切に把握する必要がある。しかし、日本におけるこのような調査は数えるほどしかない。

そこで我々は、日本の大学生における性暴力被害の実態と、性暴力に関連する知識を調査した。さらに、性暴力被害経験と精神健康度との関連について検討し、大学における性暴力被害者に対する支援や性暴力に対する予防教育の必要性を明らかにすることを目的とした。

## II. 対象と方法

### 1. 対象

対象は20歳以上の大学生とし、機縁法にて協力の得られた10大学に在籍する3,357人にアンケート調査票を配布した。

### 2. 調査方法

2016年11月より2017年11月に、無記名・自記式のアンケート調査を実施した。大学で行われる講義において、各大学の研究責任者が「参加は自由であること」を口頭で説明し、調査票を配布した。調査の内容がプライバシーにかかわるため自宅に持ち帰り、記入後に各自が封筒に入れ郵送、もしくは研究責任者が回収した。

学生が以前に性暴力被害にあったが回避・忘却していた場合に、調査をきっかけに精神不安定になる可能性があるため、説明文書に大学内の相談先を記載した。また、調査後に性暴力被害に対する情報提供と教育を目的とした「大学生のための性暴力救援サイト NOSVVA」(<https://nosvva.net/>)と案内カードを作成、調査票に同封した。サイトでは全国の性暴力救援センターについての情報提供とメール相談を行った。

### 3. 調査内容

本調査は、回答者の心身に影響を与える可能性があり、軽微な侵襲を伴うと考えられる。「人を対象とする医学系研究に関する倫理指針」の規定により、文書でインフォームド・コンセントを受けなければならないが、無記名のアンケート調査であるため、調査票に以下の説明文書を同封し、調査票の回答をもって同意とみなした。

- 1) 本研究の目的及び意義、方法及び期間
- 2) アンケートの回答は任意であり、回答しないことで不利益を受けることはないこと
- 3) 個人情報の取り扱い、情報の保存、保存期間、廃棄の方法
- 4) 相談等への対応

調査票は野坂らの実態調査<sup>6)</sup>、精神健康調査票12項目版テスト (General Health Questionnaire-12, 以下GHQ12と略)<sup>7)</sup>を参考に作成した。性暴力被害、レイプの定義はそれぞれ、米国司法局による全国犯罪被害調査 (National Crime Victimization Survey) の定義である「レイプ既遂または未遂を除く、幅広い被害。被害者の望まない性的接触を伴う攻撃や、攻撃未遂など。被害者の体をつかんだり、なでるといった暴力的行為があったかどうかは問わず、言葉による脅しも性

暴力に含まれる」、「身体的、または心理的に強制された性交。性交とは膣、肛門、口腔への加害者による挿入を意味する。性器の挿入だけではなく、物を用いた挿入も含まれる」を用いた<sup>6)</sup>。また、性暴力被害は、

- 1) 言語的性暴力被害：体についてからかわれたりいやらしいことを言われた
- 2) 視覚的性暴力被害：相手の体や性器を見せられた
- 3) 身体接触を伴う性暴力被害：無理やり体を触られたり抱きつかれた
- 4) 情報ツールによる性暴力被害：携帯電話・スマホなどで性的に嫌な経験をした
- 5) レイプ未遂：セックスされそうになった
- 6) レイプ既遂：無理やりセックスされたとした<sup>6)</sup>。

調査票は以下のとおりである。

- 1) 属性：性別、年齢、学部、国公立、大学所在地域
- 2) GHQ12：GHQはGoldberg<sup>7)</sup>らが開発した自記式の質問紙で、本研究ではGHQ法により採点し、カットオフ値は平均値から決定する方法<sup>8)</sup>に従い、4点以上を精神不健康とした。
- 3) 性暴力被害の実態：性暴力被害経験の有無・種類・回数・時期・加害者・場所、もっとも傷ついた被害、被害の相談先、被害への対処、セカンドレイプの有無
- 4) 性暴力に関する知識：緊急避妊ピル・性暴力救援センター・セカンドレイプについての知識
- 5) 自由記入欄

### 4. 分析方法

#### 1) 分類

学生の専攻分野は、学部を基に医療系と医療系以外に分類した。大学所在地域は、総務省20指定都市 (地方自治法第252条の19第1項の指定都市の指定に関する政令、平成24年4月1日施行)を都市とし、それ以外を地方とした。

#### 2) 性暴力被害強度、重複数の定義

性暴力被害で身体への接触が高くなるほど被害強度が高くなると仮定し、「性暴力被害経験なし」を被害強度0、「言語的性暴力被害」及び「情報ツールによる性暴力被害」を被害強度1、「視覚的性暴力被害」を被害強度2、「身体接触を伴う性暴力被害」を被害強度3、「レイプ未遂」を被害強度4、「レイプ既遂」を被害強度5とした。

また、異なる種類の性暴力被害を重複して受けた経験を性暴力被害重複とした。

### 3) 解析方法

解析の手順はまず、各項目に対する回答における性差を調べるために、性暴力被害経験の有無、被害状況の分類、性暴力に関連する知識の有無に関する判定について、それぞれ性別とクロス集計してカイ二乗検定を行った。次に、被害経験と自覚的健康度や知識との関連を調べるために、被害経験の有無における二群間のGHQ得点平均値についてt検定を行い、被害経験の有無と性暴力に関連する知識の有無に関する判定についてクロス集計し、カイ二乗検定を行った。性暴力被害強度および被害重複数とGHQ得点との関連は、Spearmanの相関係数を求め検討した。続いて、性暴力被害強度および被害重複数について、それぞれの値ごとに群分けし、Kruskal-Wallis検定でGHQ得点の群間比較を行い、さらにGames-Howell検定の多重比較法で解析した。また、学生の医療系区分、国公立、大学所在地域（都市・地方）、年齢などの項目とGHQ得点との関連について重回帰分析を行い検討した。

分析には統計ソフトIBM SPSS statistics 21.0 J for Windowsを使用し、有意水準5%未満を有意な差と判定した。

### 5. 倫理的配慮

本調査は、島根大学医学部医の倫理委員会(No.2672)及び参加研究機関の倫理委員会にて承認を得た。

## Ⅲ. 結果

### 1. 対象者の属性

配布、回収したアンケート調査票のうち、有効回答の得られた643部を分析対象とした（回収率19.6%、有効回答率97.7%）。

性別は男子191人（30.0%）、女子452人（70.0%）で、平均年齢は22.6±4.1歳（男子24.3±5.8歳、女子22.2±3.5歳）と、女子に比べ男子で有意に年齢が高かった（ $p<0.001$ ）。GHQ得点の平均値は3.4±3.0点（男子3.1±3.0、女子3.5±3.1）、専攻分野別では医療系の学部が73.3%（男子72.3%、女子73.7%）で、それぞれ性別における有意差はなかった。国公立別では国公立が75.9%（男子67.0%、女子79.6%）、地域別では地方が72.8%（男子63.9%、女子76.5%）と、いずれにおいても男子に比べ女子が有意に多かった（それぞれ、 $p=0.001$ ）。

### 2. 性暴力被害経験

性暴力被害経験率は、何らかの性暴力被害（以下、総性暴力被害）経験のある学生が42.5%（273/643）で、「言語的性暴力被害」が27.2%（175/643）、「視覚的性

暴力被害」が13.7%（88/641）、「身体接触を伴う性暴力被害」が23.9%（153/641）、「情報ツールによる性暴力被害」が7.2%（46/643）、「レイプ未遂」が7.8%（50/643）、「レイプ既遂」（17/643）が2.6%であった。総性暴力被害、言語的性暴力被害、視覚的性暴力被害、身体接触を伴う性暴力被害、レイプ未遂において、男子に比べ女子の被害率が有意に高かった【図1】。

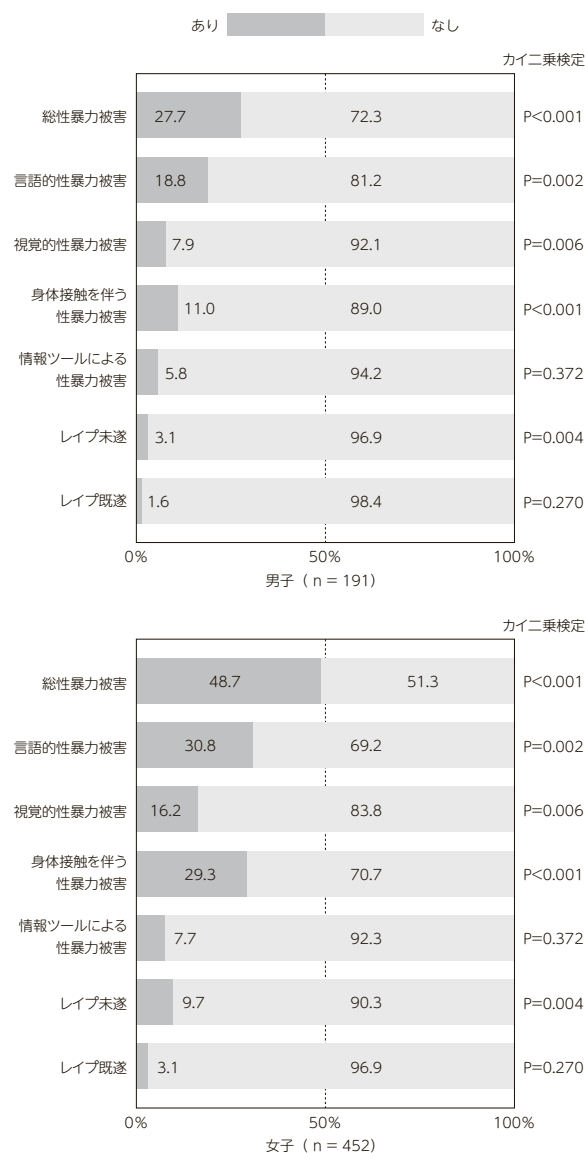


図1. 性暴力被害率

被害経験がある学生で「被害について、どこ（だれ）に相談しましたか」との設問に回答のあった164人のうち、「だれかに相談した」と答えた学生は48.2%（79/164）であった。相談相手を複数回答で尋ねたところ、延べ回答数は111件であり、その内訳は「友人・知人」が43.3%、「家族・親戚」が34.2%、「警察」が11.7%、「学校関係者」が9.0%、「医療関係者」が0.9%、「民間の相談機関」が0.9%であった。

レイプ未遂の相手は、友達40.0%、恋人 32.0%、知

り合い30.0%、知らない人 10.0%、教師 2.0%で、レイプ既遂の相手は、友達47.1%、恋人 35.3%、知り合い 23.5%、知らない人 11.8%であった（重複あり）。

### 3. 性暴力に関連する知識

緊急避妊ピルについては60.5%（386/643）が「名前も効果も知っている」、性暴力救済センターについては13.7%（88/643）が「名前も支援も知っている」、セカンドレイプについては39.5%（254/643）が「名前も意味も知っている」と答えていた。全項目において、性別における有意差はなかった【図2】。

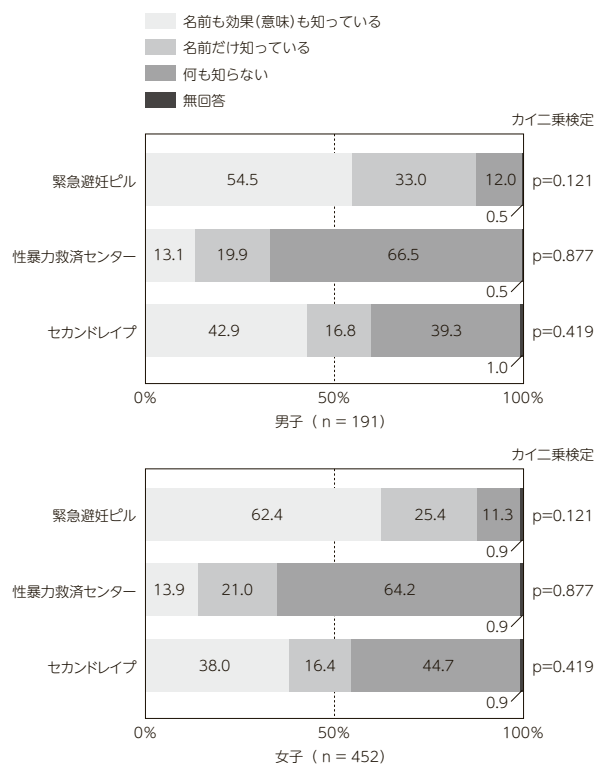


図2. 性暴力に関連する知識

### 4. 性暴力被害経験の有無と年齢、

#### GHQ得点、性暴力に関連する知識

性暴力被害経験と年齢、GHQ得点との関連では、被害経験のない学生と比べ被害経験のある学生で、平均年齢、GHQ得点が有意に高かった【表1】。

表1. 性暴力被害経験と年齢、GHQ得点との関連

	被害経験あり (n = 273)	被害経験なし (n = 370)	p値
	Mean ± SD	Mean ± SD	
年齢	23.1 ± 4.7	22.3 ± 3.7	0.036
GHQ得点	4.2 ± 3.2	2.7 ± 2.8	<0.001

緊急避妊ピルについては、被害経験のある学生の63.0%（172/273）、被害経験のない学生の57.8%（214/370）が「名前も効果も知っている」、性暴力救

援センターについては、被害経験のある学生の15.0%（41/273）、被害経験のない学生の12.7%（47/370）が「名前も支援も知っている」と答え、いずれにおいても差はなかった。

セカンドレイプについては、被害経験のある学生の44.7%（122/273）、被害経験のない学生の35.7%（132/370）が「名前も意味も知っている」と答え、被害経験のない学生に比べ、被害経験のある学生が有意に高かった（ $p=0.025$ ）。

また被害経験をだれかに相談したと回答した79人のうち、「実際セカンドレイプを受けた」と答えた学生は5.1%で、75.9%が「受けなかった」、11.4%が「よくわからない」、1.3%が「その他」、6.3%が無回答であった。

### 5. 性暴力被害強度・重複数とGHQ得点

性暴力被害強度において精神健康度（GHQ得点）は、被害強度0と被害強度1、3、5の間に有意差を認めた【図3】。被害強度とGHQ得点との相関係数は0.233（ $p<0.001$ ）と、弱い正の相関を認めた。

性暴力重複数において精神健康度（GHQ得点）は、性暴力被害重複数0と1、2、3、5種類との間に有意差を認めた【図4】。性暴力被害重複数とGHQ得点

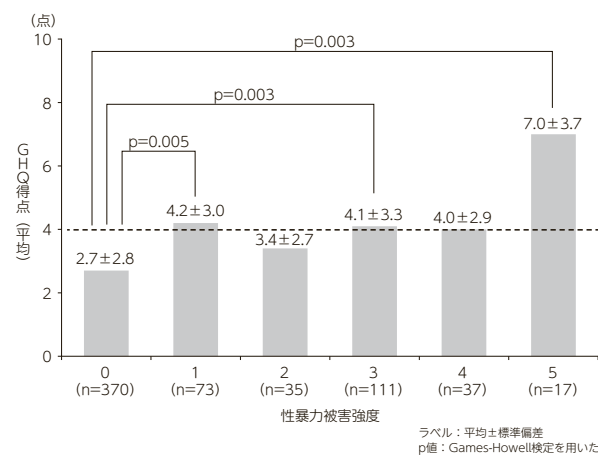


図3. 性暴力被害強度別GHQ得点

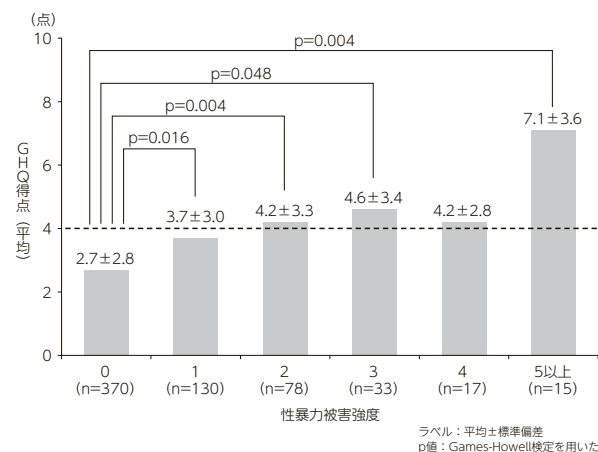


図4. 性暴力被害重複数別GHQ得点



との相関係数は0.269 ( $p < 0.001$ ) と、弱い正の相関を認めた。

また、GHQ得点を従属変数とし、年齢、性別、性暴力的被害強度、学部の医療系区分、国公立、地域を説明変数とする重回帰分析をステップワイズ法で行った。解析の結果、決定係数 $R^2$ は0.066と有意に高かった ( $p < 0.001$ )。説明変数中、年齢における標準偏回帰係数 $\beta$ は-0.107と有意に高い絶対値を示し ( $p = 0.005$ )、性暴力被害強度における $\beta$ も0.243と有意に高かった ( $p < 0.001$ )。同様にGHQ得点を従属変数とし、説明変数の性暴力被害強度に代わり性暴力被害重複数を投入し重回帰分析を行った結果、決定係数 $R^2$ は0.087と有意に高かった ( $p < 0.001$ )。説明変数中、年齢における標準偏回帰係数 $\beta$ は-0.122と有意に高い絶対値を示し ( $p = 0.001$ )、性暴力被害重複数における $\beta$ も0.285と有意に高かった ( $p < 0.001$ )。ただし、性暴力被害強度の場合で $R^2 = 0.066$ 、性暴力被害重複数の場合で $R^2 = 0.087$ と予測精度は低く、これらの説明変数だけではGHQ得点は予測できない結果となった。

#### IV. 考察

2015年に Association of American Universities (AAU) はアメリカ27大学 15万人以上による性暴力被害経験調査の結果、大学入学後に23%の女子学生と5%の男子学生が同意のない性行為 (接触も含む)、11%の女子学生がレイプ・レイプ未遂を経験していた<sup>9)</sup>、と報告した。このような性暴力に関する調査は、侵襲を伴うため倫理審査が必要で、行いにくいのが現状である。本研究では、学生が調査後に不安定になった場合にメールで相談できる態勢を整えた上で、調査を行った。また、「大学生のための性暴力救援サイト」を作成し、性暴力についての心理教育と全国の性暴力救援センターの紹介を行った。内閣府の調査によると、性暴力被害者の56.1%が「誰にも相談しない」と答えており<sup>10)</sup>、あらかじめ性暴力にあった時の対処方法等について教えることは重要である。本研究において、性暴力被害についての調査のみならず、性暴力に関する予防教育を行ったことは意義がある。

##### 1. 性暴力被害経験について

本調査の結果、言語的性暴力被害率は男子18.8% (先行研究、以下同じ、4.8~13.3%<sup>3, 4, 11, 12)</sup>)、女子30.8% (24.9~34.5%<sup>3, 4, 11, 12)</sup>)、レイプ未遂率は男子3.1% (0.0~2.0%<sup>4, 11, 12)</sup>)、女子9.7% (7.9~11.4%<sup>4, 11, 12)</sup>)、レイプ既遂率は男子1.6% (0.0~1.8%<sup>3, 4, 11, 12)</sup>)、女子3.1% (1.8~3.9%<sup>3, 4, 11, 12)</sup>) と、男子は先行研究より

高く、女子はほぼ同じであった。視覚的性暴力被害率は、男子7.2% (2.4~10.2%<sup>3, 4, 11, 12)</sup>)、女子16.2% (31.1~54.3%<sup>3, 4, 11, 12)</sup>) と、先行研究に比べ女子の被害が少なかった。身体接触を伴う性暴力被害率は、男子11.0% (3.3~9.6%<sup>3, 4, 11, 12)</sup>)、女子29.3% (36.0~64.0%<sup>3, 4, 11, 12)</sup>) と、男子は先行研究より高く、女子は低かった。情報ツールによる性暴力被害率は男子5.8%、女子7.7%と、男子高校生被害率の2.4%<sup>6)</sup>より高く、女子高校生被害率の10.1%<sup>6)</sup>より低かった。これらの総性暴力被害経験率は42.5% (男子27.7%、女子48.7%) で、先行研究の男子25.0%<sup>4)</sup>、女子74.0%<sup>4)</sup>と比較して、男子は高く、女子は低かった。

本研究では、どの被害においても先行研究と比べ男子の被害率が高かった。先行研究はいずれも男性の被害が話題に上ることの少なかった2000年以前に行われている。近年、メディアで男性の被害が取り上げられるようになり、2017年の刑法改正で男性の被害に対しても「強制性交等罪」が認められるようになったことなどより、被害として認識されるようになった可能性が示唆される。男子においても性暴力被害への支援や予防教育が必要と考えられる。一方、女子において、言語的性暴力被害率、レイプ未遂率、レイプ既遂率は先行研究とほぼ同じであったが、視覚的性暴力被害率、身体接触を伴う被害率は先行研究に比べて低かった。頻度の多い性暴力として「痴漢」や「性器の露出」があり、見知らぬ人から受けることが多いと報告されている<sup>12)</sup>。本調査の対象者は72.8%が地方に在住しており、このような被害が少ないため視覚的性暴力被害率、身体接触被害率が低く、総性暴力被害率も影響されて低くなっていると推測された。

また、レイプ未遂、既遂の相手は、ほとんどが恋人、知り合いで、従来の報告<sup>4, 6)</sup>と同様、顔見知りの間で起こるデート・レイプであった。知らない人からの被害と比べてデート・レイプでは、「信じてもらえないのではないか」といった不安から、誰にも相談せず、必要な支援が受けられないことが多い<sup>13)</sup>と言われている。大学においてデート・レイプやデートDVについての講義を行うことが肝要である。

##### 2. 性暴力に関連する知識について

緊急避妊ピルについては60.0%が知っていたものの、性暴力救援センターについて知っている学生は13.7%にすぎず、性暴力被害にあった時に適切な支援が受けられない可能性が示唆された。大学に入学してから一人暮らしを始める学生が多いため、新入生に対して性暴力被害にあった時の対処方法について教育することが必要と考えられる。

性暴力被害を受けた人が、支援者や周囲の人からの配慮に欠けた言動により再び傷つけられるセカンドレイプについては、39.5%の学生が知っていた。被害経験のある学生にセカンドレイプの知識が高かったことより、被害を受けたことで、被害の相談に関して敏感になったり相談を躊躇した可能性が示唆される。性暴力被害を相談する相手は友人が最も多い<sup>11)</sup>ので、友人など周囲の人がセカンドレイプをせずに被害者を支援することが重要である。欧米の大学においては、一般学生が被害者を支援につなげる「性暴力への介入」が重視されており、レイプ神話の修正、ジェンダーについての教育が効果的と言われている<sup>14)</sup>。わが国においても大学生に対して性暴力予防教育を行う必要がある。

### 3. 性暴力被害経験と精神健康度について

性暴力被害経験のある学生は精神健康度が低く、身体への接触が高い被害ほど、あるいは被害の重複が多くなるほど、メンタルヘルスに深刻な影響をもたらすことがわかった。「暴力や脅しによる挿入を伴った重度性被害では、外傷性ストレス症状や不安・恐怖症状がより顕著であり、周囲に気を配り、自己の感情や考えを外に表さずに自己コントロールする傾向がある」<sup>15)</sup>という報告や、「被害女性46名対象の調査で、来談時にPTSDと評価された者が69.6%、PTSD生涯診断（外傷的出来事後から最近までの間にPTSDと診断される）と評価された者が89.1%であった」<sup>16)</sup>との報告がある。性暴力被害者は、自己を制御したり、「被害事実の過小評価」<sup>4)</sup>「解離」<sup>16)</sup>などの防衛機制を用いるため、表面上は平静に見える可能性がある。性暴力被害者に出会う可能性のある大学相談機関の支援者は、被害者のメンタルヘルスに留意し、支援につなげていくことが重要であると考えられる。

本研究で明らかになった大学生の性暴力被害に対して、どのような支援が可能かは大学によって差があると考えられるが、大学において性暴力被害直後からの支援体制の整備が必要と考えられる。近年、わが国においても性暴力被害者に寄り添い、治療や心のケア、犯罪捜査等を多方面から支えるワンストップ支援センターが設置されている<sup>17)</sup>。わが国においては、社会や大学の性暴力に対する認識が未だ低く、大学で独自に性暴力相談室を作ることは困難と考えられるため、大学の学生相談機関は地域のワンストップ支援センターと連携し、被害者を支援することが必要不可欠と考えられる。

### 4. 今後の課題

本研究の限界として、対象者が調査協力を得られた

大学の学生に限られ、サンプルに偏りがあることがあげられる。本来であれば無作為抽出の上、郵送調査を行うのが望ましいが、本調査は軽微な侵襲を伴うため、研究責任者による口頭での説明と調査後の相談体制が必須であった。また、アンケートの回収率が19.6%と低かった。性暴力被害調査はその性質上回答率が低く、一般成人からの無作為抽出標本で実施された調査の回答率は19.1%<sup>18)</sup>、AAUの調査の回答率は19.0%<sup>9)</sup>と報告されている。以上のような偏りのある集団からの結果ではあるが、大学生の実態として社会に提示することが必要である。そして、このような研究結果をもとに、大学において性暴力被害者支援と性暴力に対する予防教育についての体制整備が進むことが課題である。同時に、教育の普及により、より偏りの少ないサンプルによる実態調査の実施が期待される。

## V. 結語

今回の調査より、大学生の性暴力被害経験率は、「レイプ未遂」が7.8%、「レイプ既遂」が2.6%、何らかの性暴力被害経験のある学生は42.5%であった。緊急避妊ピルについての知識は60.0%にあったものの、性暴力救援センターについて知っている学生は13.7%にすぎず、性暴力被害にあった時に適切な支援が受けられない可能性が示唆された。

以上より、大学生に対して、性暴力に対する予防教育を行うと共に、大学の相談機関における性暴力被害者に対する支援方法の確立が急務と考えられた。

## 謝辞

本研究を実施するにあたり、アンケートの主旨を理解下さりご協力いただいた大分大学 穴井孝信先生、関西大学 多賀太先生、京都大学 高山佳奈子先生、滋賀医科大学 高橋健太郎先生、越田繁樹先生、鳥取大学 原田省先生、山口大学 高瀬泉先生、性暴力救援センター全国連絡会 加藤治子先生を始めとする関係者の皆様に深謝いたします。またアンケート調査に回答して下さった学生の皆様に、心より御礼申し上げます。

## 付記

本研究はJSPS科研費 JP16K01759の支援を受けて実施した。

本論文に関しCOI関係にある企業などはない。本論文の要旨は第55回全国大学保健管理研究集会、第39回全国大学メンタルヘルス学会にて発表した。

## 文 献

- 1) 法務省法務総合研究所,平成29年度版犯罪白書.2017
- 2) 法務総合研究所,第4回犯罪被害実態(暗数)調査について.平成25年度版犯罪白書2012
- 3) 小西聖子,日本の大学生における性暴力被害の調査.日本=性研究会議会報1996: 8: 28-47
- 4) 岩崎直子,日本の男女学生における性的被害.こころの健康 2000: 15(2):52-61
- 5) 河野美江, 早瀬真知子, 長廻久美子, 他, 大学生における性暴力被害者支援について. CAMPUS HEALTH 2016:53(1): 328-329
- 6) 野坂佑子, 笹川真紀子, 吉田博美, 他, 高校生の性暴力被害実態調査. 女性のためのアジア平和国民基金2004
- 7) Goldberg DP, Hiller VF, A scaled version of the General Health Questionnaire. Psychol Med 1979:9: 139-145
- 8) 鳥悟, 全般的的精神状態・精神健康度の評価. 臨床精神医学増刊号 2004:29-36
- 9) David Cantor, Hyunshik Lee, Bonnie Fisher, et al, Report on the AAU Campus Climate Survey on Sexual Assault and Sexual Misconduct. AAU (Association of American Universities) report 2015
- 10) 内閣府, 男女間における暴力に関する調査2017
- 11) 中嶋一成, 宮城由江:心への侵入. 本の時遊社. Pp.207-264,1999
- 12) 小西吉呂, 名嘉幸一, 和氣則江, 石津宏, 大学生の性暴力被害に関する調査報告 - 警察への通報および求められる援助の分析を中心に -. こころの健康2000:15 (2) :62 - 71
- 13) Ullman SE, Siegel JM, Victim-offender relationship and sexual assault. Violence and Victims 1993;8:121-134
- 14) Rape Myth Beliefs and Bystander Attitudes Among Incoming College Students. Sarah McMahon. Journal of American college health 59(1),3-11,2010
- 15) 石井朝子, 飛鳥井望, 小西聖子, 他, 性的被害によるトラウマ体験がもたらす精神的影響 - 東京都女子大学生調査の結果より -. 臨床精神医学2002:31 (8) :989-995
- 16) 廣瀬小百合, 小西聖子, 白川美也子, 他, 性暴力被害者における外傷後ストレス障害:抑うつ, 身体症状との関連で. 精神神経学雑誌2002:104 (6) :529-550
- 17) 内閣府犯罪被害者等施策推進室, 性犯罪・性暴力被害者のためのワンストップ支援センター設立の手引. 2015
- 18) 性暴力被害少年対策研究会, 少年の性暴力の実態とその影響に関する研究報告書. 性暴力被害少年対策研究会編. 社会安全研究財団助成研究事業:1998



# A Study of the Correlation between the Experiences of Sexual Assault Victims and the General Health Questionnaire (GHQ)-12 among Japanese University Students.

Yoshie Kono<sup>1)</sup>    Mika Shigyo<sup>1)</sup>    Miwako Takeda<sup>2)</sup>    Yosuke Orihashi<sup>3)</sup>  
Nobutaka Okusa<sup>4)</sup>    Wataru Kawashima<sup>5)</sup>    Yasuko Fuse-Nagase<sup>6)</sup>

1) Health Care Center Matsue, Shimane University

2) Center for Community-Based Healthcare Research and Education (CoHRE), Shimane University

3) Graduate School of Social Sciences, Hiroshima University

4) Department of Forensic Dentistry, Osaka Dental University

5) Department of Anatomy, Osaka Dental University

6) University Health Center, Ibaraki University

**Keywords**    University Students, Sexual Assault Victims, General Health Questionnaire

## Abstract

Despite recent reports of sexual violence among university students, few victims seek advice at the counseling center. Urgent reorganization of the system, offering easy access, is needed. We have investigated the correlation between sexual abuse and mental health, and the students' awareness of sexual violence and actual abuse conditions, aiming to demonstrate the need for preventive education and victim support.

Subjects/methods: an anonymous, self-administered questionnaire survey was conducted at 10 universities among 3,357 students over the age of 20 recruited via snowball sampling, and 643 valid responses analyzed (recovery percentage 19.6%).

Results: rape attempts 7.8% (males 3.1%, females 9.7%), completed rapes 2.6% (males 1.6%, females 3.1%). 42.5% had experienced some form of sexual violence. Although 60.0% knew about emergency contraception, only 13.7% knew of the support center. The GHQ score of victims of sexual violence was  $4.2 \pm 3.2$  points and significantly higher ( $p < 0.001$ ) than that of others, showing a weak ( $p < 0.001$ ) correlation with the seriousness or frequency of the abuse and a significant impact on mental health in severe cases.

Establishing support measures for assault victims at counseling centers, and relevant preventive education, is of the utmost importance.